

# 農村の保育園

## 磯部景子

Y県のある片田舎の保育園の子どもたちの保育園内外の生活を  
ご報告します。

これから登場する子どもたちが住んでいる町について

これから登場する子どもたちは、本州の西のはて、Y県の瀬戸内海側にほど近い片田舎に住んでいる。小さな盆地で、あたりは小さな丘に囲まれている。丘のひとつに登ってみわたすと、ひとつかたまりの町並がみえて、すぐに田んぼになる。そして、田んぼの中にぼつん、ぼつんと何軒かの家が見える。

町並のほぼ中央には東西に道がとおっていて、東の丘にお宮がみえ、西の丘に小学校、中学校とお寺が見える。町並の北はずれの田んぼの中には国道二号線が走っていて、大型トラックや乗用車などがひっきりなしにとおる。西の丘のふもとには南北に県道

がとおっている。そして西の丘のふもとでこれらの道が交叉する。ここは、町中でただひとつの信号機のある横断歩道である。

郷土史家のはなしによると、この町が、やや形を整えたのは、参勤交代がはじまって、宿場になってからのことであり、現在でも町の形は、その当時とあまり変わっていないという。町の中を東西にとおっている道が昔の街道である。小さい小路がいくつか、この道に直角に交わる。

町にはたったひとつの町立の中学校とたったひとつの町立の小学校とたったひとつの私立の幼稚園とたったひとつの私立の保育園がある。

町の朝は、一瞬、子どもたちの声でにぎやかになる。子どもたちはにぎやかにしゃべりながら、学校へ、幼稚園へ、保育園へといそぐ。そして、町の中はまた静かになる。

町どおりの南はずれ田んぼのすぐ近くに住んでいるSが、保育園に入園するまで

Sは昭和三十八年（一九六三年）二月生れの男の子です。Sが生れた頃はSのうちの家族構成はひいおじいさん、ひいおばあさん、おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さんとSでした。現在は妹のYが三歳になり、祖父母、父母、SとYの六人家族です。祖父母は五十代であろう。老齢というにはほどとおく、祖父は最近会社を退職したばかりで、祖母は農業に精を出している。父は会社員です。

Sはだんだん大きくなって、どんどん歩けるようになって、おとなが知らぬ間に、家をぬけ出して町どおりへと出かけるようになり、おばあさんか、お母さんが、何回となく、Sを捜しに町に出かけることになる。Sは、あちら、こちら、と立ちよる。近所のおじいさんが日なたぼっこをしていたり、新聞を読んでいる、おじいちゃん」といって楽しそうにしゃべり出す。時々、老人の「ほー」とか「ふーん」ということがきこえることがあるが、大方はSがひとりでしゃべっている。そして、しばらくすると「またねー」といってどこかへ行く。

Sはもっと大きくなって、三輪車に乗れるようになると、こんどは三輪車に乗って町どおりに出かける。

夏の農家の朝は早い。Sも朝早く起きる。六時すぎには、もう、ひとりで三輪車に乗って町どおりへと出かける。あちら、こちらと立ち寄りながら町どおりと小路にはさまれた五十メートル四方くらいの一角をひとめぐりして帰っていく。時折、三輪車をどこかにおいたまま帰ることもある。すると、今度はおばあさんとふたりで足早に三輪車を捜しに行く。Sがおばあさんに三輪車のありかを説明する。「こういってねー、ずうっといって、こういってー、……」この説明は三輪車の姿がみえるまで続く。Sとおばあさんは、Sが三輪車でとおった道を、とおった順序にしたがって歩いていく。町かどをまがって、またまがって……と行きついでみると、反対まわりで行った方が、よほど近いところだったりする。

やがてSは四歳になり、夏が来る。

夏は子どもが近所の家にあがりこむ、絶好の機会である。

夏になると、多くの家では、ほとんど終日、窓やガラス戸をあけて簾や格子戸だけになる。子どもたちは格子戸から家の中をのぞいているうちに、家の中の人たちと親しくなり、やがて、あがりこんで遊ぶようになる。

Sは毎朝早く三輪車で出かける。何やら大きい声で歌ったり、呼んだりしながら、チリン、チリンと進んでいく。ふと、近所の家の窓があいているのを発見する。Sは三輪車から降りて格子に

近より、そっと、家の中をのぞきこむ。しばらくみていて、家の中に人の気配を感じると、大きい声で何か呼ぶ。何回か呼んでいると、家の中の人が気づいて格子の中から顔を出す。Sはひとしゃべりして、町どおりへと出発する。Sの日課に、ひとつ、楽しみがふえる。

Sはいつものように、朝早く三輪車で出かける。窓があいているのを発見してからは、格子戸の家に近づくと、少し声をおとして、静かに、そっと格子戸に近づく。窓がしまっていると、またはじめの調子にもどって、何やら歌いながら、スピードをあげる。窓があいていると、「ぼくねー、これから、おでかけでーすーよー」と大きい声で呼ぶ。

Sは窓の中の人たちとだんだん親しくなると、毎日のように窓の家を訪れるようになる。「ぼく、Sくんですーすーよー」といって、家の中にあがりこんで遊びはじめ。

Sは遊びながら、いろいろとしゃべる。Sの妹の名前がYであること、近所にSの好きな家があること、そこにはお兄ちゃんとUお姉ちゃんがいて、彼らは小学生であること、親戚にAちゃんという子どもがいることなど。

Sは運転手になるのが大好きで、「おとうちゃんのくるまにのって、おでかけでーす。まえにおとうちゃんと、ぼくがのって、うしろに、おかあちゃんとYちゃんとUおねえちゃんと、おにい

ちゃんと、えーと、それから、それから、おばあちゃんとおばあちゃんどー、Aちゃんところにおでかけでーす。Aちゃんここは、こういって、こういって……」といてS式の道順の説明がはじまる。Aはおばあさんの実家の孫で十五キロメートルくらい離れた町に住んでいる。「ぼくねー、おおきくなったら、がっこうにいいたら、ひかりごうのうんてんしゅになるんでーすーよー。おばあちゃんおのせて、Yちゃんおのせて……」このようにして遊びつつける。しばらくすると、「またねー、バイ・バイ」と帰っていく。

農家ではお昼寝をたっぷりする。朝が早いことや、真昼の暑さをさけて、夕方から、また、仕事にとりかかることなどと関係があるだろう。

Sは家の人みんなお昼寝をして、ひとりですまらなくなると、窓の家に出かけて行く。いつものように遊びに出かけたある日、いつもとちがって、窓がしまっている。Sはおこって大きな声をはりあげて、「おもしろくないな、おもしろくないな。ぼく、おひるねなんか、だいきらいでーすーよー。Yちゃんもおかあちゃんも、おばあちゃんも、ぼく、おひるねなんか、だいきらいですーよー」と帰っていく。

このようにして夏が過ぎて、小学生が二学期をむかえる。ある日、Sがとてもうれしそうに、ぼく、ようちえんにいくんでーすー

よー」といいはじめた。

九月には、何人かの子どもが保育園に入園する。夏やすみがおわり、小学生が学校に行きはじめると、幼児のいる家庭では、おとなはあらためて、子どもをふりかえり、やはり、子どもを幼稚園に行かせた方がよさそうだとつよく感じるようになる。

Sは保育園に入園するが、Sは「よ・う・ち・えんにいくんでーすーよー」といつているし、おとなも幼稚園といっている。

### 保育園と幼稚園

この町では、保育園のことを幼稚園といっている人が多い。幼稚園と保育園は次のような理由で混同してつかわれている。

一、長い間、町には、たったひとつの保育園があるだけだった。Sが通っている保育園は、大正十五年（一九二六年）に西の丘のお寺の住職によって、社会事業の一環、「託児部」として出発した。学校に行きたいと思っている幼児が、「託児部」へあつまってきた。社会事業のひとつとしてはじまった「託児部」は幼児教育の重要な機能を果たすことになり、長い間、幼稚園として町の人に親しまれてきた。

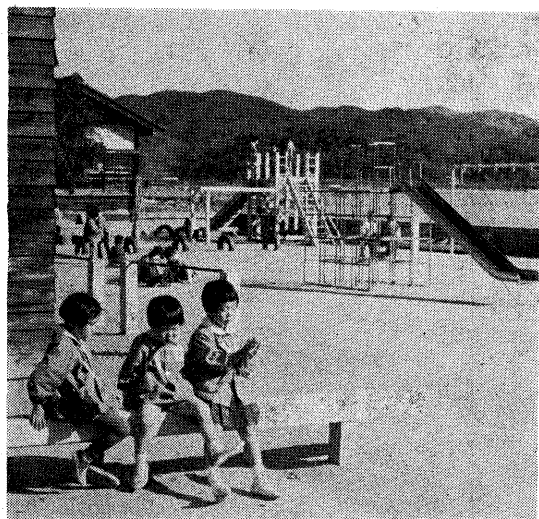
二、昭和三十年（一九五五年）に私立の幼稚園が設立された。しかし片田舎では幼稚園も午後の保育があるなどで、幼稚園と保育園の区別がつきにくい。片田舎では幼稚園的な保育園と保育園

的な幼稚園が存在している。

幼稚園が設立されて、十年以上たった現在でも保育園のことも幼稚園といっている人が多い。

設立当時のことなどは後に述べることにして、まず、保育園に出かけることにする。

保育園にでかける



保 育 園 の 園 庭



園庭で死んでいるもぐらを見つける。  
 「生きちゃったなあ(生きていたらなあ)」といい、  
 「もぐちゃん、もぐちゃん」と呼びかける。

Sが保育園に入園してから一年と一カ月経過した。保育園は西の丘のふもとにあり、県道に面している。まわりは、ずっと田んぼである。

保育園に来る子どもは、みんな、どうしても、この県道をとおらなければならぬ。県道はかなり頻繁に自動車がおとる。交通安全問題はこの保育園の大きな関心事のひとつである。

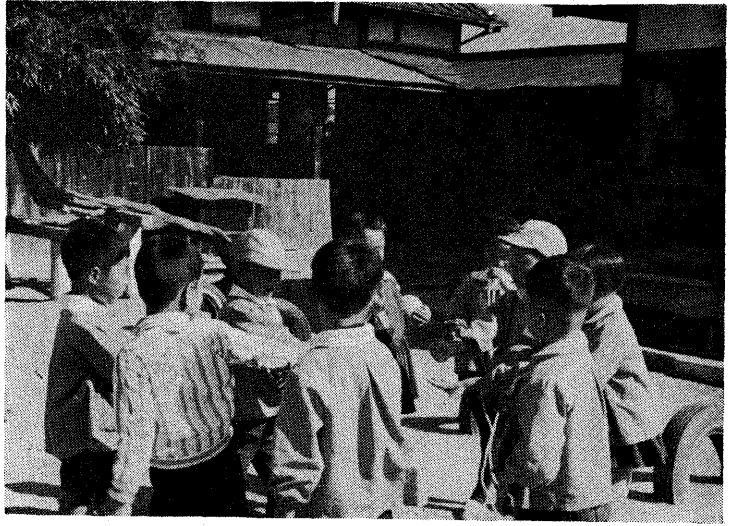
保育園の子どもたちは、保育園に不意にあらわれたおとなに対して、相当数の子どもが関心を示す。「このひと、なにぐみのせ

んせいになるん?」「なにしてるの?」「わー、しゃん、さんこ(三枚)もうつつちゃった」「しゃん、うつして」「わたし、Kっていうの。おねえさんがいて、おにいさんがいて、おとうとがいて、いもうとがいて……」などなど。目立たないようにするのには、どうしたらよいのだろうと、時々、思ってしまう。

### 保育園の一日の概観

#### 子どもたちの遊び

子どもたちは、ほとんど一日中を遊んで過ごす。お天気がよければ、庭で遊ぶ子どもが多い。みていると遊びの展開会場にいるような気持ちになってくる。「かごめ・かごめ」「どおりゃんせ」「あやとり」「ハンカチ遊び」「二人三脚」「なわとび」「まりつき」「玉ころがし」「ダイヤとび」「ダイヤころがし」「リレー」「サッカー」「いい粉とり」「お団子つくり」「もぐらのもぐちゃん」「トンボとり」「フラダンス」「落下傘部隊」など。遊びの規模はお団子にたとえると、三歳の子どもの手の中に入る小さなお団子や直径五十センチくらいの大きなお団子が、庭のあちこちころがっているように人数はひとりあそびから九人くらいいっしょに遊ぶのまで、時間も一瞬にきえるものから一時間以上続くものなどいろいろである。



じゃんけんしてこれからサッカーがはじまる。

これらの遊びについては、これもまた、後に述べることにする。

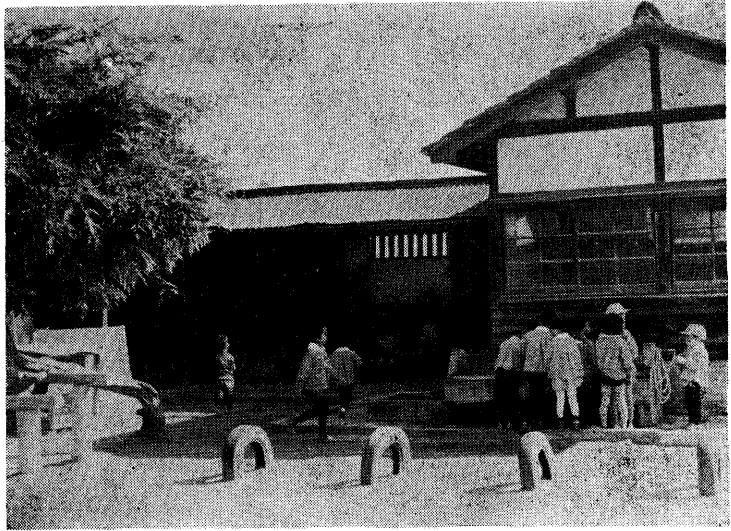
## 。保育園の朝

庭で主任の先生が遊具を整備している。七時四十分にはA先生といっしょに最初の子どもが登園する。A先生は間もなく制服とズボンに着がえて、横断歩道の旗を持って門の前に立つ。B先生が登園する。A先生は子どもたちが登園するたびに子どもを門へと誘導する。子どもたちは黄色い帽子をかぶり、黄色いかばんを肩にかけている。子どもたちは門に入ると庭をとおおり、下足棚に寄る。それから遊戯室に入り遊戯室をとおり抜けて、それぞれのクラスの保育室に行く。年長、年中、年少の三つの保育室がある。子どもたちはかばん掛けにかばんを掛けると、あちこちにちらばっていく。九時半頃にはほとんどの子どもが登園して、A先生は保育室に帰ってくる。

### 。クラス別にわかれる

子どもたちはあちらこちらで遊んでいる。ジーンとベルがなる。と庭にいる子どもたちは手洗い場にあつまってきて、手を洗って遊戯室へといそぐ。ベルにつづいて、音楽が流れてくる。遊戯室で子どもたちは年長児、年中児、年少児とクラス別にならぶ。各年齢、一クラスずつで、全員で六十五、六名。

ベルのなる時間は日によってちがうようだ。十一時にベルがなつた日は、全員で紙芝居をみて、クラスごとに保育室に行つて、すぐに「おべんとう」の歌をうたつて、おべんとうになる。十時



集合 ベルがなると子どもたちはあちらこちらから手洗い場にあつまってくる。手を洗って、遊戯室へといそぐ。

半にベルがなつた日は、遊戯室で全員で朝のさん仏歌をうたつて、クラス別になつて、運動会の絵をかいて、それからおべんとうになる。給食がある。

。当番

さん仏歌をうたうとき、男、女、各一名ずつの当番が前に出て本尊の扉をひらく。さん仏歌を全員でうたつて、そのあと扉を閉じる。昼食後、年長児の何人かの当番が各クラスの先生といっしょに保育室のそうじをする。

。帰園

三時にベルがなつて、全員の子どもが遊戯室にあつまってクラス別に並ぶ。夕のさん仏歌をうたつて、おやつになる。さようならの歌をうたつて、庭に出る。帰る方向別に三つのグループに分かれて、先生に引率されて帰宅する。

。さん仏歌

朝のさん仏歌

月かげのいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

生きて身を蓮はすの上にやどさずば

念仏申すかいやなからむ

夕のさん仏歌

如来大悲の恩徳は 身を粉こにしても報すべし

師主知識の恩徳も 骨をくたくたくでも謝すべし